

ナガオカモノアラガイ *Oxyloma hirasei* (Pilsbry)

【選定理由】

水田周辺の土手や水路脇草地、休耕田や湿地の草地などに普通に見られる種(野々部・他, 1984)であったが、愛知県下では、水田環境自体の減少や、近年の雑草などの殆ど生えない整備された水田、農業方法の変化に伴う乾田化、休耕田や湿地などの草地の減少により、分布域の減少傾向が著しい種である。名古屋市では近年の調査において、本種が発見されていない(川瀬, 2013)。かつて生息していた水田に見られなくなるなど、名古屋市を中心とする地域から開発などにより、徐々に姿を消しつつある種である。ただし、岡崎市、蒲郡市などでは近年も個体群が健在な地域もあり、現時点の愛知県下では、直ちに絶滅に向うほどの状況にはないと考えられる。全国的にも減少傾向が懸念される種であり、愛知県下では都市部を中心に減少傾向にあることから、今後の絶滅の危険性を考慮すべき種と考えられる。

【形態】

成貝は、殻長 11.8~14.4 mm、殻径 6.9~7.3 mm 程度の細長い楕円形状の外形をした小形種である。殻はきわめて薄く脆く、螺塔がごく小さく、殻長の殆どを体層が占める。殻口は広く、成熟しても唇縁は薄いままで肥厚しない。臍孔は生じない。殻表は淡黄褐色の殻皮が覆い、成長脈が認められる程度で目立つ彫刻はなく、ほぼ平滑で弱い光沢を有す。軟体は粘液に富み、腹足は淡黄白色で、眼触角は黒い。



蒲郡市西田川河畔, 2005年4月13日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内各地の平野部の水田周辺や水路周辺などの湿地環境の草地に生息するが、生息地はそれ程多くはなく、名古屋市では消滅寸前の状態である。西三河~東三河にかけての平野部の水辺周りには、現時点でも個体群が健在な環境が存在している。

【世界および国内の分布】

韓国に分布が知られる(權・他, 1993)。国内では、本州(主に関東以西)、四国、九州に分布する(東, 1995; 神田, 1992; 西・西, 2018; 財団法人 自然環境研究センター, 2010)。北海道の分布記録については、ミヤマオカモノアラガイ *Succinea* sp. とされる種の存在もあり(栗原・多留, 2012)、正確に本種の記録であるのか、定かでない。

【生息地の環境/生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、水田周辺や小河川・水路周辺の主に雑草地である。小水路の壁面に付着する個体も良く確認される。本種の生態として、静岡県中部の個体の研究結果(早瀬, 2008)においては、産卵は4月と8月頃に2回のピークがあると考えられ、春型(春季新規加入群)と夏型(夏季新規加入群)は、それぞれ寿命が約半年と1年で異なる生活史を送る。夏型は冬に休眠するため、殻に明瞭な休止帯を有し、春型とは殻形態が異なる。卵は各卵が分離しているが1箇所にまとめて塊状に産卵される。卵径は約 0.8 mm の球形でゼリー状、産卵後 2 週間程度で孵化する。

8月頃の産卵には、産卵日のばらつきとその後の稚貝の成長速度の差が著しいことが推察され、越冬時の幼貝の殻の大きさには、きわめて小形の個体から、ほぼ成貝に近い大きさの個体までの変異幅が著しい。

【現在の生息状況/減少の要因】

犬山市焼野の水田で本種を確認(1993.6.1採取の夏型個体の標本)していたが、その数年後には確認出来ないなど、既に個体群が消滅している場所も少なくない。名古屋市内をはじめ、周辺都市部にかけては同様の状況にあると思われる。ただし、現在も岡崎市や蒲郡市では、水質の良くない小河川周辺でも確認される(木村昭一, 私信)など、尾張部と比べて西三河~東三河にかけての平野部の水辺環境では、現時点においても、本種個体群の健在な生息地が確認される状況にある。

本種の減少要因としては、愛知県下では、水田自体の減少や、近年の雑草などが殆ど見られない整備された水田、近年の農業方法の変化に伴う乾田化、開発や整地に伴う休耕田や湿地環境に代表される荒地や雑草地の減少、などの本種の生息環境の著しい減少が指摘できる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の湿地環境を維持することが重要である。本種は、夏季に個体数を増大させる生態的特徴があり、夏季の大形個体(春型)は、水路などを經由して様々な場所に拡散して秋までに全て死滅する。したがって、秋~冬に本種の幼貝(夏型)が越冬できる湿地環境が本種にとって最も重要な湿地環境となるので、そのような環境を開発などにより破壊しないことが最も重要である。

【特記事項】

環境の保全や周辺生物に配慮した農法を実践する水田においては、本種の著しい個体数が確認される例を観察している。本来、本種は古くから見られる里山環境においては普通種であるので、本種の保護に関しては、かつての水田環境の復元地域を試験的に設けることも、保護手法のひとつになると考えられる。ヒラマキガイ科の絶滅危惧種の一部の種の保護にも該当する内容と考えられる。

【引用文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80 pls. + 343 pp. 保育社, 大阪.
- 早瀬善正, 2008. 静岡市清水区能島遊水池におけるナガオカモノアラガイの生活史, 兵庫陸水生物, (60): 151-157.
- 權 佐吉・朴 甲萬・李 俊相, 1993. 原色韓国貝類図鑑, 445pp. Academy Publishing Company, Seoul.
- 神田正人, 1992. 大分県陸産貝類誌, 160 pp. 自刊.
- 川瀬基弘(監修), 2013. なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編 - なごやで探そう! カタツムリ -, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- 栗原康裕・多留聖典, 2012. 2011 年度軟体動物多様性学会例会観察会(北海道)報告(前編), Molluscan Diversity, 3 (2): 121-133.
- 西 邦雄・西 浩孝, 2018. 宮崎県のカタツムリ, 149 pp. 自刊(黒潮出版), 宮崎.
- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
- 財団法人 自然環境研究センター, 2010. ナガオカモノアラガイ, p.814. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)